

CHT Newsletter

Research Center for Cultural Heritage and Texts



名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター



Contents

2025年—CHTの新たな展開に向けて 2

2023年度活動報告

国際ワークショップ 現在のなかの過去 4

2024年度活動報告

国際カンファレンス Formation and transmission
of social memory 5

国際シンポジウム アジアの文化遺産と
交流史 6

フォーラム *Etoki* from Japan 7

シンポジウム 2024年度 大須文庫
調査研究報告会 8

2019–2024年度研究活動 9

2025年—— CHT の新たな展開に向けて

周藤 芳幸

名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター長・教授

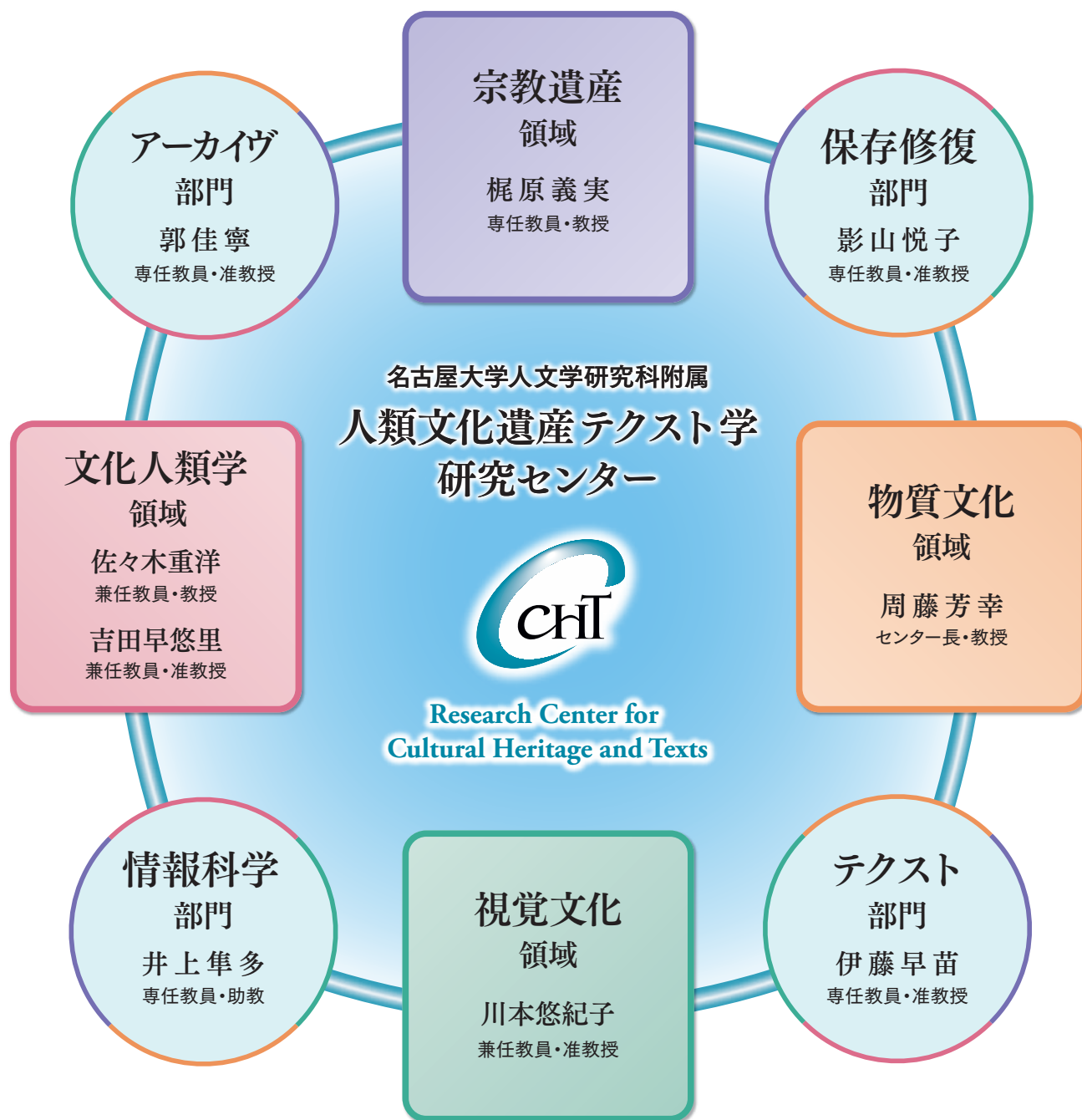
名古屋大学人文学研究科では、2023年度に附属人類文化遺産テキスト学研究センター（以下、CHT センター）の設置期限を翌年4月1日から2029年3月31日まで5年間延長するための計画を大学本部に申請し、関係副総長等と交渉を重ねた結果、無事に年度末までに承認を得ることができた。当時の研究科長として、書類のとりまとめなどに尽力された梶原義実前センター長をはじめとするセンター教員各位に、まずは厚く御礼申し上げたい。本学では、部局の附属センターの設置期限については5年間の原則とされているが、2014年度に旧文学研究科に設置されたCHT センターについては、すでに2019年度末に最初の時限を迎えるにあたって5年間の延長を認められた経緯がある。今回、再度の設置期限延長という異例の措置が認められたのは、何よりも歴代センター長のイニシアティブのもとで精力的に続けられてきた国内外での研究活動の成果が高く評価されたためであり、そのリーダーシップに敬意を表するとともに、活動を支えてくださったすべての部局の関係教員、研究員にも改めて感謝申し上げたい。

さて、今回久しぶりにCHT センターのニューズレターを刊行するにあたり、センター発足の経緯を振り返ってみると、旧文学研究科では、テキスト学による高度な教育・研究の拠点化を目指して進めてきた21世紀COEプログラム、及びグローバルCOEプログラムの到達点を継承するための新たな研究センターの創設を模索するなかで、2013年の9月に開催された教員懇談会では、新センターを大型研究費の受け皿とするためにも、すでにそのような研究費を獲得している、あるいはこれから獲得を目指す教員を中心にメンバーを構成するべきだ、あるいは、研究だけではなく研究者を育ててアカデミアに人材を輩出する組織とすべきだ、そのためにもサポート体制をしっかりとしないといけない、等の意見が交わされていた。結果として2014年4月には、CHT センターはセンター長の阿部泰郎教授が代表を務めるアーカイブズ部門に物質文化部門と視覚文化部門とが加わる3部門体制でスタートした。センターの創設記念研究集会「前近代社会における知の伝達方

法」は、同年4月19日に学振の外国人招へい研究者として研究科に滞在していたベルリン自由大学教授のエジプト学者ヨヘム・カール博士をゲストとして行われたが、私個人としても、これに着想を得た研究プロジェクトが翌年度から科研費基盤研究(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」(2015-2017)に採択されたことが、何よりも思い出深い。ちなみに、このプロジェクトは科研費基盤研究(A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」(2018-2022)、同「古代西ユーラシア世界における知のネットワークとそのエージェンシー」(2024-2028)に引き継がれて現在にいたっている。

その後、CHT センターは、阿部教授を研究代表者とする科研費基盤研究(S)「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究」(2014-2018)、研究大学強化促進事業による学内の最先端国際研究ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」(2015-2017)、国際研究拠点事業 Core-to-Core プログラム「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」(2017-2021)、さらには故近本謙介教授を研究代表者とする科研費基盤研究(A)「中世拠点寺院の蔵書と美術に基づく人と知のネットワーク解明」(2020-2022)などの推進を通じて、着実に発展を遂げてきた。阿部教授の跡を継いで2023年4月からセンター長に就任する予定だった故近本教授が同年2月に出張先のパリで急逝されたことは、センターにとってあまりに大きな痛手だったが、急遽後任を務めることになった梶原教授のもとで設置期限の延長にこぎ着けることができた経緯については、冒頭に述べた通りである。

こうして第3期に入ったCHT センターは、新たに優れた若手・中堅の部局教員を加えることで、大きな飛躍のときを迎えようとしている。そこでは、これまでの国際的な活動をさらに発展させるとともに、地域の文化遺産に基づく価値の創出にも貢献することが、将来に向けて重要な課題となっている。関係各位のいっそうのご支援とご協力を心よりお願いする次第である。



名古屋大学研究力強化促進事業 ● 最先端国際研究ユニット
文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット
Cutting-Edge International Research Unit
“Cultural Heritage and History of Exchange in Asia”

現在のなかの過去

——古代地中海世界(とその周辺)における文化的記憶とそのエージェンシー

The Past in the Present: Cultural Memory and its Agencies in the Ancient Mediterranean World (and Beyond)

2024年3月20日(水)ー22日(金) 国立ギリシア研究財団歴史学研究所

2024年3月20日から22日まで、アテネの国立ギリシア研究財団歴史学研究所 (Institute of Historical Research, National Hellenic Research Foundation) において、科学研究費基盤研究 (A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」(2018-2022、研究代表者: 周藤芳幸) による国際研究集会「現代のなかの過去——古代地中海世界(とその周辺)における文化的記憶とそのエージェンシー」を、第5回日欧古代地中海世界コロキウムとして開催した。日欧古代地中海世界コロキウムとは、2005年に桜井万里子(現・東京大学名誉教授)とキャサリン・モーガン(現・オックスフォード大学教授)を中心に組織された研究集会であり、同年ロンドンで開催された第1回に続いて、第2回(2009年)は東京大学で、第3回(2014年)はアテネの在ギリシア・イギリス考古学研究所で開催された。第4回のコロキウムは2018年9月に名古屋大学で行われ、その成果は、Yoshiyuki Suto (ed.), *Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World*, Wien: Phoibos Verlag, 2021として刊行されている。第5回のコロキウムについては、2022年度内にアテネで開催する予定であったが、コロナ禍のために準備が思うように進まず、結局、科研費を繰越すことによって(この手続きは困難をきわめたが)2023年度末に開催するにいたったものである。この間、2022年度から研究科長職に就き、大学の管理運営業務に忙殺されるようになったため、報告予定者との日程調整などについては師尾晶子氏(千葉商科大学)と佐藤昇氏(神戸大学)のお二人に、また会場の確保についてはNHRFのアンティゴニ・ズルナツィ博士にほぼすべてお任せする形になってしまい、大変心苦しく存じている。また、科研費の繰越と現地での複雑な執行処理については、事務補佐の竹尾美里氏にお骨折りいただいた。記して心から感謝申し上げたい。

さて、近年の西洋古代史研究では、さまざまなメディアを介した文化的記憶の構築とその伝達のあり方に対する関心が新たな高まりを見せている。文化的記憶は、過去をもに作る社会集団のアイデンティティと密接に関わっているが、それは「共有された歴史」こそが、その集団の独自性と持続性の基礎となっているためである。「共有された歴史」についての知識が正典化され、維持され、伝達されるにあたっては、それが多様なメディアを通じて客体化され、コード化されなくてはならない。しかし、それが文化的記憶として結晶する過程では、そのようなメディアを駆動するヒトやモノのエージェンシーの存在が不可欠となる。

このような問題意識のもとで開催された今回のコロキウムでは、NHRFのニコラオス・パパツアルカダス所長や在アテネ日本大使館の関係者の臨席を得て行われた初日のレセプションに続き、二日間にわたって古代地中海世界とその周辺世界における文化的記憶とそのエージェンシーに関する研究報告と討議が行われた。紙幅の関係で参加者の詳細については省略するが、その所属研究機関の国別内訳は、ギリシアが6名、イギリス、ポーランド、イタリアなどのヨーロッパ諸国が7名、日本が6名である。今回のコロキウムの特色は、国際的に著名な古代ギリシア史・ローマ史の研究者だけではなく、アケメネス朝ペルシアやアッシリアを専門とする研究者の参加を得ることができたことにあり、わが国における今後の西洋古代史研究の発展に向けて、新たな方向性を示すことができたのではないかと考えている。なお、本コロキウムの報告集は、2026年にNHRFが刊行する学術誌 *Meletemata* の特別号として刊行される予定である。

(周藤芳幸 CHTセンター長・教授)



2024年度活動報告 ● 国際カンファレンス

Formation and transmission of social memory: Indonesia and Japan

社会的記憶の形成と継承——インドネシアと日本

2024年10月18日 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

2024年1月31日に、インドネシアの国立スラバヤ大学で国際シンポジウム“International joint conference on Science and Humanities ‘Recent study on Cultural Heritage and Social Education’”が開催された。この国際シンポジウムにはCHTのメンバーをはじめ、名古屋大学の構成員から8名が登壇した。インドネシア滞在中は、シンポジウムに加えてエクスカージョンも実施し、インドネシアにおける有形・無形の文化遺産の見学を行った。日本と同様にアジアの島嶼国であるが、日本とは全く異なる歴史的背景を持つインドネシアの歴史と文化の一端に触れたことで、日本考古学を専攻してきた報告者にとっても非常に印象深い行程となった。

同年10月18日、インドネシアでの国際シンポジウムを受けて、名古屋大学で国際カンファレンス“Formation and transmission of social memory: Indonesia and Japan”「社会的記憶の形成と継承——インドネシアと日本」を開催した。登壇者は名古屋大学から6名（梶原義実教授・野澤暁子CHT共同研究員・郭佳寧特任准教授・井上隼多助教・Noor Naelil Masruroh 大学院生・Flady Faliyenco Franggaratz Abubakar Pae 大学院生）と、インドネシアから6名（Fathur Rokhman 国立スマラン大学教授・Wasino 国立スマラン大学教授・Eko Handoyo 国立スマラン大学教授・Nasution 国立スラバヤ大学教授・Septina Alrianingrum 国立スラバヤ大学准教授・Aditya Indrawan 国立スラバヤ国立大学研究員）となった。

カンファレンスは梶原義実教授のウェルカムスピーチで開幕した。続いてキーノートスピーチとして、Fathur Rokhman 教授、Wasino 教授、Eko Handoyo 教授が相次いで登壇し、インドネシアと日本を文化的・社会的視点から比較した発表が行われた。インドネシアの若年層ではマンガ・アニメをはじめとする日本のサブカルチャーが強い影響力を持っているだけでなく、行政による不正の阻止をはじめとする政策においても、日本社会のあり方が参照されているなど興味深い議論が展開された。

つづいて、野澤暁子研究員、Nasution 教授、Septina Alrianingrum 准教授、Aditya Indrawan 研究員による、インドネシアの民間伝承に関する共同発表が行われた。

以上でカンファレンスの前半は終了し、つづいて各参加者によるプレゼンテーションへと移行した。インドネシアと日本の関係性に限らず、幅広い分野から社会的記憶の形成と形象に関する事例報告が行われ、聴講に来ていた留学生も交えて質疑応答が盛んに交わされた。

カンファレンス終了後はインドネシア料理の立食で懇親会を開催し、意見交換が行われた。インドネシア料理のケータリングを初めて食べる日本人参加者も多く、貴重な経験となった。

（井上隼多 CHT 専任教員・助教）



2024年度活動報告 ● 国際シンポジウム

アジアの文化遺産と交流史——儀礼空間を巡って

Cultural Heritage and the History of Exchange in Asia: Perspectives on Ritual and Ceremonial Spaces

2025年3月10日 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール (ハイブリッド開催)

2025年3月10日(月)に名古屋大学において、国際シンポジウム「アジアの文化遺産と交流史——儀礼空間を巡って」を開催した。最先端国際研究ユニット「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」の研究成果報告会として、さらに、2013年に発足して10周年を迎えたCHTセンターの第3期キックオフシンポジウムとして企画した。

最先端国際研究ユニットは、名古屋大学の研究大学強化促進事業の一つで、学内の教員と学外から招聘・採用された研究者によって構成され、その設置目的は、本学の研究活動の強みを一層発展させ、世界拠点形成を目指すことである。理系のユニットがほとんどの中、2019年度にCHTセンターの近本謙介教授が組織した「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」が採択された。発足時のメンバーは、近本教授(日本中世文芸)、梶原義実准教授(日本考古学、現在は教授)、程永超 YLC 助教(東アジア交流史、現在は東北大学准教授)、ハンブルク大学のステファン・デル教授(日本仏教史)の4名で、2年目に報告者(中央アジア文化史)が加わった。

本ユニットは、アジア文化遺産プロジェクトと東アジア交流史プロジェクトを併走させることで、文化遺産と交流史のアジア共創研究拠点を形成することを課題としている。2021年12月に行われた最終評価では最も高いS評価を得ることができ、その結果、2024年度まで3年間の経費継続支援が決定した。ようやくコロナ禍が収束し、海外の研究機関との共同研究を再開しつつあった2023年2月、

近本教授が出張先のパリで急逝された。それまで共同研究を牽引してきた代表者を失い、一時はユニットの存続が危ぶまれたが、梶原教授が代表代行(後に代表)をつとめ、さらに、近本教授の指導のもとで研究を行っていた若手研究者である郭佳寧特任准教授を新メンバーとして迎え、近本ユニットの活動継続が承認された。

成果報告会では、人文学研究科長の周藤芳幸教授による開会挨拶の後、梶原教授が6年間(2019～2024年度)のユニットの活動の概要を報告した。次に、5人のメンバーが、宗教的または外交的儀礼が行われた空間に焦点をあて、アジアの文化遺産と交流史の実態を示す研究発表を行った。梶原は古代の飛鳥宮をめぐる宗教的空間構成について論じ、影山はシルクロードの商人であるソグド人の宗教儀礼について考古資料をもとに検討した。ステファン・デルは、中世・近世の禅宗における七堂伽藍について、郭佳寧は真言密教における講とその儀礼空間について報告を行った。程永超は朝鮮通信使と琉球使節の外交儀礼について論じた。後日、本シンポジウムを聴講した編集者から書籍化の打診があり、現在、論文集の刊行に向けた準備を進めている。

なお、経費支援終了後も、本ユニットはCHTセンターと連携し、共同研究を続けていく。今後も文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニットの活動にご理解、ご協力をいただければ幸いである。

(影山悦子 CHT 専任教員・准教授)



2024年度活動報告 ● フォーラム

Etoki from Japan

聖徳太子絵伝絵解きフォーラム in ニューヨーク

2025年3月11日 ㈫ アメリカ・コロンビア大学 The Forum

2025年3月11日、コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センターの主催する「第十五代千宗室日本文化講演会」2025年度公演として、北米大陸では初めてとなる聖徳太子絵伝の絵解き「*Etoki* from Japan」が開催された。

本公演は、センター長であるハルオ・シラネ氏（コロンビア大学教授）からの委嘱を受けて、阿部泰郎氏（本学高等研究院客員教授）と共に、阿部美香が企画したものだが、その背景には、CHT 初代センター長であった阿部氏が、CHT の国際研究展開として JSPP グローバル展開プログラム（2016～2019年度）の中核的な課題に中世太子絵伝のデジタル化と地域における絵伝絵解き文化遺産の国際共同研究を位置づけて推進し、今なお、地域の方々と協働しての継続的な活動がある。

シラネ氏は、CHT による Core-to-Core プログラム（2017～2022）の共同研究者であり、CHT との共催により、国際ワークショップ「山と海の神仏・境界と越境—中世日本の異界遍歴・異類婚姻譚・変身の世界」（2022年10月14日、於コロンビア大学）や、国際研究集会「境界、芸能、神仏」（2019年3月16日、於コロンビア大学）等を催している。本公演は、それらの研究活動を経て実現された、文化交流事業であった。

聖徳太子の「和」の心と文化を、絵解きに乘せて世界へ発信したいとの願いのもとで、1年間の準備期間を経て、ニューヨークのハーレムにあるコロンビア大学 The Forum において、シラネ氏の総司会のもと、四天王寺の山岡武明師、三河すーぱー絵解き座の座長柳野明仁師、榊田英伸師の3人の絵解きが披露された。

当日は、会場ロビーに、愛知県安城市の浄土真宗本證寺に伝来する重要文化財の聖徳太子絵伝9幅と善光寺如来絵伝5幅の原寸大高精細複製を掛け並べ、来場者に解説するところからイベントがスタートした。



公演では、シラネ氏の挨拶、および阿部美香による「絵解きとは何か」、阿部泰郎氏による「本證寺絵伝とその絵解き」のレクチャーを皮切りに、日本での絵解き伝承の場を紹介する映像を上映し、山岡師は日本最古の太子絵伝とその絵解きを再興した四天王寺の絵解きを英語で説き、榊田師は太子がNYへ黒駒に乗って飛んできたという設定のなりきり絵解きを演じ、柳野師は琵琶を演奏しながら太子と守屋の戦いを迫真の語りで歌い上げた。その上で、山本聡美氏（早稲田大学教授）から、中世仏教説話画に本質的に備わる声の役割をめぐるコメントがあり、最後は柳野座長が『平家物語』敦盛の一段を語って終幕を飾った。

いずれも英語の字幕を付けて、会場に集まった百余名の市民や学生の理解を助けたが、公演後のデスカッションを含め、現代における絵伝と絵解きの意義を実感してもらう貴重な契機となり、大変な好評を得た。

フォーラム前日の10日には、プレイベントとして、コロンビア大学 Kent Hall にて、パーク日本美術研究センターによる学術ワークショップ「描かれた聖なる山—須弥山・霊鷲山・富士山」が開催された（早稲田大学共催）。山本聡美氏が法華経の霊山、梅沢恵氏（共立女子大学教授）が熊野三山、タリア・アンドレア氏（ウェズリー大学准教授）が富士参詣曼荼羅を報告し、阿部美香は現代に再生された富士山絵伝とその絵解きを紹介、阿部泰郎氏は聖徳太子絵伝の富士山と黒駒伝承を取り上げた。大学院生のコメントを兼ねた小報告を含めて、マシュー・P・マッケルウェイ氏（コロンビア大学教授）の司会のもとで、集まった研究者や院生たちと活発な議論が行われた。

フォーラム翌日の12日は、ハドソン川河畔にある、ニューヨーク仏教教会にある、広島の実験親鸞像を表敬訪問し、柳野師の琵琶語りが奉納され、平和への祈りを捧げた。

帰国後には、絵伝を伝える本證寺フェスティバルや、本證寺（西尾市）、順念寺（岡崎市）の彼岸法要にて、NY公演の成果報告講演を行った。シラネ氏も本證寺と本證寺に表敬訪問され、より発展的な文化交流の実現にむけての語らいが継続中である。

（阿部美香 CHT 研究員）

2024年度活動報告 ● 公開シンポジウム

2024年度大須文庫調査研究報告会

2024 Osu Bunko Survey and Research Report Meeting

2025年3月28日 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

2025年3月19日(水)、CHT センターは真福寺大須文庫との研究協定を締結した。その後、同月28日(金)、名古屋大学にて「2024年度大須文庫調査研究報告会」が開催された。本報告会は二部構成で行われ、第一部「文庫整理の歴史と課題」では、2024年度に名古屋大学が進めた大須文庫調査活動の進展および今後の課題が報告された。第二部「真福寺善本叢刊第3期『神道篇別巻』刊行記念報告」では、大須文庫所蔵の神道関係資料の重要性について、最新の研究成果が紹介された。

第一部では、まず大須文庫長の鳥居和之氏により「文政目録から黒板目録へ」と題して報告がなされた。享保15年(1730)に宍海が「大須真福寺経蔵目録」(文政目録)23冊を編纂した時点で、すでに蔵書の流出が進んでいた。昭和期には東京帝国大学の黒板勝美教授らによる調査が行われ、「大須文庫悉皆調査目録」(通称「黒板目録」)204冊が完成した。現在は「黒板目録」を基礎として「令和の文庫目録」作成が進められており、聖教と古文書を均等に扱う必要性や、流出資料の所在把握・記録照合が今後の課題とされている。続いて、三好俊徳氏(仏教大学)が「名古屋大学による調査の成果と課題」と題して報告した。三好氏の報告では、名古屋大学を中心に行われてきた大須文庫の調査研究の経緯や、真福寺の歴史的背景、僧侶間のネットワークの解明が紹介され、大須三流の寺内における位置付けや、聖教書写の計画性といった課題が提示された。第一部の最後には、郭佳寧(名古屋大学)が「コロナ禍以降の大須文庫調査の現状」を報告した。特に、今後の目録作成の効率化、断簡を含む蔵書の保全、大須文庫全体の価値に関する発信などの方針が示された。



第二部では、まず大東敬明氏(國學院大學)が「大須文庫所蔵神道関連聖教の調査と復元——八十通印信・『諸大事』を中心に」と題して報告した。『諸大事』の現存諸本の比較分析から収録内容や構成の相違を明らかにし、大須文庫本の独自性を指摘するとともに、聖教全体との関係や原本所在の確認が課題として提示された。続いて、伊藤聡氏(茨城大学)が「中世神道研究史上における真福寺(大須観音)神道文献の重要性」という題目で報告した。大須文庫は、鎌倉・南北朝時代の神道写本を多数所蔵し、『太田命訓伝』のような中世写本として唯一現存するものや、他本の祖本となった事例も多い。調査の進展により、従来は能信期の収集と考えられていた神道書の多くが後代に伝来したこと、またその伝来ルートの一部が判明したことが報告され、今後はその形成過程のさらなる解明と、他本との比較による祖本関係の確定が課題とされた。

本報告会では、これまでに行われた真福寺大須文庫に関する調査・研究の成果と課題を再確認するとともに、日本神道史研究における大須文庫所蔵資料の新たな価値が見出された。また、名古屋大学 CHT センターは今回の研究協定締結を踏まえ、断簡調査および悉皆目録の完成などを含めた今後の事業方針を明確にした。

(郭佳寧 CHT 専任教員・特任准教授)



2019年度研究活動

シンポジウム

説話文学学会2019年度大会—— 律をめぐる宗教的環境と説話文学との架橋

オーガナイザー 近本謙介 [名古屋大学]

西谷 功 [泉涌寺宝物館] 「鎌倉期戒律復興の実像——泉涌寺僧が果たした役割」

大谷由香 [龍谷大学] 「南都における宋代新潮仏教の流入と復古」

高橋悠介 [慶應義塾大学附属研究所斯道文庫] 「称名寺の説話資料と律」

近本謙介 [名古屋大学] 「北京・南都における律の展開と交差をめぐる史料と言説」

コメンテーター 野呂 靖 [龍谷大学]・土屋有里子 [学習院女子大学]

2019年6月29日(土)14:00-17:30 名古屋大学野依記念学術交流館 カンファレンスホール



フォーラム

井波太子伝絵解きフォーラム——

【第一部】聖徳太子絵伝公開フォーラム

——井波別院八幡太子絵伝のデジタル複製制作とその活用をめぐる

阿部泰郎 [龍谷大学] 「絵解き文化と太子絵伝」

村松加奈子 [龍谷ミュージアム] 「美術史における絵伝と絵解き」

竹部俊恵 [妙蓮寺住職] 「別院の伝統継承」

【第二部】絵解き広場——聖徳太子と善光寺如来の絵伝絵解きを語る

竹部俊恵 [妙蓮寺住職] 井波別院太子絵伝絵解き説法

郭佳寧 [名古屋大学] 聖徳太子絵伝絵解き

小林玲子 [長野郷土史研究会] 「善光寺参り絵図」絵解き

柳野明仁 [三河すーぱー絵解き座] 聖徳太子絵解き (琵琶演奏入り)

2019年6月23日(日)10:30-16:30 井波別院龍泉寺 太子堂 (富山県南砺市)



絵ものがたり絵解きがたり——平野に伝わる聖徳太子絵伝——

【第一部 | 絵ものがたり】講座「聖徳太子絵伝」

阿部泰郎 [龍谷大学]・沖松健次郎 [東京国立博物館]・大澤研一 [大阪歴史博物館]

村松加奈子 [龍谷ミュージアム]

【第二部 | 絵解きがたり】お軸の前で「絵解き」実演

末松美咲 [名古屋大学]・柳野明仁 [三河すーぱー絵解き座座長]・郭佳寧 [名古屋大学]・榎田栄伸 [三河すーぱー絵解き座]

【第三部 | 特別公開】全興寺秘仏「聖徳太子稚児像」御開帳

2019年7月27日(土)10:00-15:00 杭全神社 瑞鳳殿 (一部・二部) / 15:00-17:00 全興寺 本堂 (三部)



講演会

古代エジプトにおける環境と人の営み—— アシュート遺跡とカンティール遺跡の事例から

講師 北川千織 [ヨハネス・グーテンベルク大学マインツ]

2019年10月2日(水)16:30-18:00 名古屋大学文学部棟 大会議室



オウィディウス『祭暦』における縁起——ローマにおける「時」の教示——

Aetia in Ovid's *Fasti*: Teaching Roman Time

講師 アンケ・ヴァルター [ニューカッスル大学]

2019年12月4日(木) 16:30-18:30 名古屋大学文学部棟 大会議室

セミナー

御伽草子『二十四孝』と近世の女子教訓書

講師 ケラー・キンブロー [コロラド大学]

2019年6月21日(金) 15:00-17:00 名古屋大学文学部棟 大会議室

ジョヴァンニ・ベッリーニ作

《ディレッティ祭壇画》に関する一考察

講師 須網美由紀 [国際ファッション専門職大学]

2019年7月7日(日) 名古屋大学文学部棟 128講義室

遼・非濁撰『新編随願往生集』にみる往生

——真福寺蔵『桑門戒珠集往生浄土伝』を中心にして

講師 李銘敬 [中国人民大学]

2019年7月19日(金) 15:00-17:00 名古屋大学文学部棟 大会議室

ゴシックの誕生とサン＝ドニにおける《古典主義》

木俣元一 [名古屋大学]

ミケランジェロの芸術における古代美とキリスト教信仰

百合草真理子 [東京藝術大学]

2019年7月28日(日) 14:00-17:00 名古屋大学文学部棟 128講義室



2020年度研究活動

シンポジウム

今後の博物館制度を考える——博物館法改正を見据えて——

総司会 半田昌之 [日本博物館協会]

【開会の挨拶】 木俣元一 [名古屋大学]

栗原祐司 [京都国立博物館] 「文化政策としての博物館法改正に向けて——その課題と展望」

小佐野重利 [東京大学] 「博物館法改正へ向けての日本学術会議への提言二つの発出を終えて」

佐々木秀彦 [東京都歴史文化財団] 「文化審議会博物館部会での審議から」

井上由佳 [明治大学] 「ユネスコ博物館勧告・ICOM 規約(博物館定義)から見た日本の博物館法」

松田 陽 [東京大学] 「観光政策と博物館認証制度」

栗田秀法 [名古屋大学] 「間に合う学芸員資格取得者の養成は可能か——新たな学芸員養成課程への課題と展望」

金山喜昭 [法政大学] 「学芸員を研究者と認定する制度について」

佐久間大輔 [大阪市立自然史博物館] 「学芸員の力を活かすために、現場でさぐる課題と活路」

【パネルディスカッション】 司会 芳賀 満 [東北大学]

【閉会の挨拶】 布谷知夫 [全日本博物館学会会長/前三重県総合博物館館長]

2021年3月2日(木) 13:00-17:00 オンライン開催



聖徳太子1400年御遠忌記念シンポジウム

聖徳太子伝とその視覚化

【挨拶】 根立研介 [美術史学会]

【趣旨説明】 藤岡 穰 [大阪大学/仏教芸術学会]

榊原史子 [成蹊大学] 「古代における聖徳太子伝の生成」

三田覚之 [東京国立博物館] 「聖徳太子信仰と太子伝の生成——造形作品の検討から」

沖松健次郎 [東京国立博物館] 「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝と平安時代の太子伝」

村松加奈子 [龍谷ミュージアム] 「「真宗系」・「南都系」聖徳太子絵伝の再検討

——静嘉堂文庫美術館本・妙安寺本を中心に——

【座談会】「聖徳太子伝とその視覚化」 司会 藤岡 穰 [大阪大学/仏教芸術学会]

【閉会挨拶】 藤岡 穰 [大阪大学/仏教芸術学会]

2021年3月21日(日)13:00-16:30 オンライン開催



ワークショップ

考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流——古代日本と中央アジア——

影山悦子 [名古屋大学] 「中央アジアの壁画から見た仏教美術の伝播」

Marina Reutova [ウズベキスタン科学アカデミー国立考古学センター] 「ウズベキスタン古代仏教壁画の保存修復」

田村朋美 [奈良文化財研究所] 「ガラス玉から見た古代日本とアジア」

Mutolib Khasanov [ウズベキスタン科学アカデミー国立考古学センター]

「ウズベキスタン南部ボイスン市ラバト村における墓地の考古学調査」

岩井俊平 [龍谷ミュージアム] 「伽藍配置から見た中央アジアにおける仏教の伝播」

梶原義実 [名古屋大学] 「景観からみた日本古代寺院の造営背景」

2021年3月5日(金)13:00-16:00 オンライン開催



セミナー

前近代中央アジアにおける文化の交流と非交流

影山悦子 [名古屋大学] 「ソグドからみた中央アジアにおける仏教文化の広がり」

齊藤茂雄 [大阪大学] 「7～9世紀における中央アジア国際情勢——スィアブ（碎葉）との関係を中心に」

早川尚志 [名古屋大学] 「トルキスタン東部の交通路のその後についての事例研究」

村田光司 [名古屋大学] 「中央アジアにおけるビザンツ型ブラクテートの伝播・類型・機能」

樋口 諒 [日本学術振興会/金沢大学] 「西アジア・中央アジアのキリスト教建築の形態的特徴と分布」

2021年1月23日(日)13:00-16:30 オンライン開催



2021年度研究活動

研究集会

西域・中国からの水脈——仏典と翻刻・俗講——

【開催挨拶・趣旨説明・講師紹介】 牧野淳司 [明治大学]

船山 徹 [京都大学] 「『今昔物語』 卷四「龍樹・堤婆二菩薩伝法語」に見る「日本化」の様相」

小島裕子 [鶴見大学] 「西域、流沙の契り——東大寺「四聖」の源流を求めて」

黒田 彰 [佛教大学] 「祇園精舎の鐘と銅鼓——祇園寺図経覚書（結）」

コメント 近本謙介 [名古屋大学]

【質疑応答・討論】 司会 牧野淳司 [明治大学]

2021年11月28日(日)13:00-17:00 名古屋大学文学部棟 237教室



フォーラム

バーミヤーン・フォーラム——二大仏の破壊前と現在：課題と展望——

宮治 昭〔龍谷大学〕「バーミヤーンの調査・研究を振り返って——二大仏の破壊とその後：現在と課題」

岩井俊平〔龍谷大学〕「新たな調査成果から見たバーミヤーン遺跡の年代」

谷口陽子〔筑波大学〕「バーミヤーン壁画の彩色材料と技術」

正垣雅子〔京都市立芸術大学〕「東大仏龕壁画の描き起こし図の作成——中央アジア壁画の模写を踏まえて」

影山悦子〔名古屋大学〕「中央アジア美術に見る三面三日月型と鳥翼型の冠飾」

2022年1月29日(土)13:00-18:00 オンライン開催



講演会

特別公開&講演・講談

お帰りなさい！ 国宝「古事記」

「古事記」観覧と解説

【講演】近本謙介〔名古屋大学〕「古事記と大須観音のひみつ」

【講談】旭堂麟林〔講談師〕「大須観音物語 国宝古事記の巻」

2022年3月5日(土)10:30-15:00 大須観音 本堂1階ホール



報告会

名古屋大学最先端国際研究ユニット

「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」中間成果報告会 (2019～2021年度)

【ユニットメンバーによる報告】

近本謙介〔名古屋大学／ユニット代表〕・梶原義実〔名古屋大学〕・Steffen Döll〔ハンブルク大学〕・影山悦子〔名古屋大学〕

程永超〔東北大学〕

2022年3月24日(木)17:00-19:00 オンライン開催



ワークショップ

玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本

吉田 豊〔帝京大学〕「玄奘三蔵とソグド人」

Erika Forte〔京都大学〕「玄奘が訪れたコートンとドモコ遺跡出土壁画」

コメント 荒川正晴〔大阪大学〕

荒見泰史〔広島大学〕「敦煌文献と玄奘三蔵」

近本謙介〔名古屋大学〕「日本中世における玄奘——『玄奘三蔵絵』とその周辺」

コメント 本井牧子〔京都府立大学〕

2021年9月29日(水)13:30-17:30 オンライン開催



大須学ワークショップ

【御講話】岡部快圓〔大須観音住職〕「大須の今昔」

【講演】鳥居和之〔大須文庫長〕「大須観音の歴史と大須の街」

【研究発表】畦高斎樹〔名古屋大学〕「大須地域の遊郭と花魁道中」

【寺域周辺フィールドワーク】現地解説 鳥居和之

2021年9月22日(水)13:00-17:00 大須観音 本堂1階ホール



国際研究集会

テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築

アメリカ ● コロンビア大学「中世日本の境界と越境の文化遺産」 ハルオ・シラネ [コロンビア大学]

アメリカ ● ハーバード大学「ハーバード美術館 南無仏太子像と像内納入品」 阿部泰郎 [名古屋大学]

フランス ● コレージュ・ド・フランス「学僧慈円の文化遺産」

ジャン・ノエル・ロベール [コレージュ・ド・フランス]

ドイツ ● ベルリン自由大学「エジプト、アコリス遺跡考古学調査プロジェクト」 周藤芳幸 [名古屋大学]

2023年3月28日(火)15:00-18:00 オンライン開催



シンポジウム

宗教遺産をめぐる真正性——宗教遺産テキスト学の発展的展開——

【セッション1】起源の創出

梶原義実 [名古屋大学]「日本古代における首長権の「真正性」と宗教モニュメントの造営

——「古墳から寺院へ」を再検討する」

阿部泰郎 [龍谷大学]「聖徳太子前世所持法華経の創成——伝記と聖遺物聖典テキストの創造」

太田泉フロランス [東京大学]「聖遺物の創出——キリスト教中世における聖性付与の諸相」

中根若恵 [南カルフォルニア大学]「エッセイ映画の作者性——原将人『初国知所之天皇』(1973)における「起源」の創出」

【セッション2】複製の自律性

芳賀京子 [東京大学]「神像の複製と信仰——古代ギリシアの場合」

西村 功 [花岡大学]「〈真正〉仏牙舎利の成立と展開」

大橋直義 [実践女子大学]「巡礼とその縁起——西国巡礼縁起を基点として」

杉山美耶子 [名古屋大学]「16世紀初頭のブリュージュ画派における聖母子像の共有と変容」

【セッション3】アプロプリエーションの連鎖

山本聡美 [早稲田大学]「図像の生命誌——意味と形のあわい」

郭佳寧 [国際日本文化研究センター]「宗教儀礼テキストに展開する実践と信仰の複合性——覚鑿撰『舍利供養式』を巡って」

木俣元一 [名古屋大学]「物質的／概念的スボリア」

三浦 篤 [東京大学]「マネをめぐるアプロプリエーションの連鎖」

【セッション4】物質性と概念性のあわい

猪瀬千尋 [金沢大学]「秘仏と可視・不可視」

樋口 諒 [名古屋大学]「ギリシャ・ラコニア地方イエローキの教会堂における光の演出——偶然か必然か？」

秋山 聡 [東京大学]「見えないものをいかに見せるか——比較宗教美術史の観点から」

山内和也 [帝京大学]「再建されたバーミヤーンの大仏は「本物」といえるのか」

【セッション5】多声性：誰にとっての真正性か

影山悦子 [名古屋大学]「王権の正統性を示す図像表現——イスラーム以前のイラン世界」

川崎剛志 [就実大学]「祖師の事績と教団のアイデンティティ——智証大師の熊野参詣を例に」

栗田秀法 [名古屋大学]「美術作品の修復と真正性」

田代亜紀子 [北海道大学]「東南アジアにおける宗教遺産とオーセンティシティ」

【セッション6】文理融合型研究における真正性

藤岡 穰 [大阪大学]「仏像の基礎研究——蛍光 X 線による金銅仏の成分分析から AI による仏顔の様式分析へ」

富島義幸 [京都大学]「変容する両界曼荼羅——建築空間をめぐる宗教的真正性」

井上準多 [名古屋大学]「考古学における3D データ解析の可能性」

2023年3月30日(木)13:00-17:50 (セッション1・2)／31日(金)10:00-18:35 (セッション3～6) オンライン開催



アコリス考古学プロジェクト 2022

小林 卓〔名古屋大学〕「ローマ帝政期における太陽神崇拝とミトラス教」
 讃岐綾奈〔名古屋大学〕「ヘレニズム期ロドスの組合と外国人」
 伊藤早苗〔名古屋大学〕「アッシリア帝国の使者と幹線道路研究」
 清水麻里奈〔名古屋大学〕「アコリス遺跡におけるワニの壁龕とその類例」
 小川拓郎〔名古屋大学〕「ニューメニア採石場址N区周辺の採石過程の復元的考察」
 周藤芳幸〔名古屋大学〕「ニューメニア採石場址の横穴ギャラリー」
 辻村純代〔公益財団法人古代学協会〕「2017年度出土ミイラのCT解析結果」
 黒沼太一〔独立行政法人日本学術振興会〕「先王朝—初期王朝時代のゲベレイン遺跡——近年の調査結果から」
 津本英利〔公益財団法人古代オリエント博物館〕「西アジア鉄器時代移行期の鉄器使用状況に関する最近の研究」
 小野塚拓造〔東京国立博物館〕「南レヴァントにおける青銅器・鉄器時代移行期の様相」
 2022年6月19日(日)13:00-18:30 名古屋大学文学部棟 237講義室 (Zoomハイブリッド開催)



講演会

宗教文化遺産学の挑戦

【特別講演】
 木俣元一〔名古屋大学〕「宗教遺産としての中世キリスト教美術」
 周藤芳幸〔名古屋大学〕「古代ギリシアの宗教文化遺産と文化的記憶」
 ——パウサニアスの『ギリシア案内記』を中心に——
 阿部泰郎〔龍谷大学〕「宗教遺産テキスト学の創成——中世寺院の知のネットワーク」
 【コメント&ディスカッション】
 ハルオ・シラネ〔コロンビア大学〕・入澤 崇〔龍谷大学〕・阿部泰郎〔龍谷大学〕
 2023年3月26日(日)14:00-17:00 Youtube 配信



ワークショップ

禅宗における宗派図・法系図に関する諸考察

——その歴史的展開・宗教的役割・社会的普及

Steffen Döll 教授〔ハンブルク大学〕
 2022年9月16日(金)14:00-16:00 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



大須学ワークショップ 2022

【御講話】岡部快圓〔大須観音住職〕「大須観音の年中行事」
 【講演】木村慎平〔名古屋博物館〕「大須観音境内の明治維新」
 【研究発表】
 畦高斎樹〔名古屋大学〕「『三廓』の分析——徳川宗春治世の名古屋における公許遊郭の構造と意義」
 三岡美友〔名古屋大学〕「町の祭祀としての馬の塔——大須観音を例として」
 【寺域周辺フィールドワーク】現地解説 鳥居和之〔大須文庫長〕
 2022年12月3日(土)13:00-16:30 大須観音 本堂1階ホール



2023年度研究活動

シンポジウム

アコリス考古学プロジェクト 2023

花坂 哲「2022年度アコリス遺跡南区調査」

和田浩一郎「2022年度調査出土の護符について」

辻村純代「出土人骨のCT・X線調査について」

高橋亮介・内田杉彦・小川拓郎「2022年度ニューメニア採石場調査」

西本真一「オベリスクの計画方法」

安岡義文「アコリスのシストルム柱頭とイオニア柱頭」

岡部 睦「グレコ・ローマン時代のエジプトにおける所謂「イシス神官」のテラコッタ像について
——アコリス遺跡出土資料の形態分析を中心に」

2023年7月1日(土)13:00-17:00 名古屋大学文学部棟 127講義室 (オンライン同時配信)



故近本謙介教授 追悼シンポジウム

【第一部】近本謙介教授と名古屋大学人文学研究科

梶原義実 [名古屋大学/CHTセンター長]・影山悦子 [名古屋大学/CHT専任教員]・郭佳寧 [名古屋大学/CHT専任教員]

松山由布子 [中京大学/元 CHT 研究員]、三好俊徳 [仏教大学/元 CHT 研究員]

【第二部】近本謙介教授の業績を語る

阿部泰郎 [龍谷大学/名古屋大学名誉教授]・荒見泰史 [広島大学]・海野圭介 [国文学研究資料館]

Steffen Döll [ハンブルク大学]、Swanson Eric Haruki [ロヨラメリーマウント大学]

【第三部】近本謙介教授真福寺大須文庫解説動画の上映

【献花による「お別れの会」】

2024年3月16日(土)14:00- 名古屋大学アジア法交流館 0221号室 (Zoomによる同時配信)



講演会

Social Interaction in the Gulf of Siam with a Reference to the Trade in Sangkhalok Ceramics

講師 Wannasarn (Saen) Noonsuk [California State University]

2023年6月26日(月)14:45-16:15 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール

Matteo Compareti 教授講演会

Simurgh or Farr? Research based on the literary and iconographic evidence

Simurgh か Farr か? 文献資料・図像資料に基づく検討

講師 Matteo Compareti [中国 首都師範大学]

2023年11月9日(木)14:45-16:15 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



セミナー

ウズベキスタンの考古遺物の保存と公開に向けた取り組み

影山悦子 [名古屋大学]「ウズベキスタン南部ザールテバ遺跡出土壁画について」

寺村裕史 [国立民族学博物館]「サマルカンド南東カフィル・カラ遺跡の発掘調査と出土遺構の保存・活用」

Marina Reutova [ウズベキスタン考古学研究所]

「壁画と木彫の保存修復——ザールテバ遺跡、カフィル・カラ遺跡、アフラシアブ遺跡出土遺物を中心に」

2023年10月10日(火)13:30-16:30 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



ワークショップ

第5回 日欧古代地中海世界コロキウム

P.4参照

現在のなかの過去

——古代地中海世界（とその周辺）における文化的記憶とそのエージェンシー

The Past in the Present: Cultural Memory and its Agencies in the Ancient Mediterranean World (and Beyond)

【Session 1】Chair: Sanae Ito [Nagoya University]

Josine Blok [Utrecht University] “Cultural Memory in the Dermatikon Accounts”

Noboru Sato [Kobe University] “Demosthenes’ Deliberative Speeches and Struggle for Memory”

Rosalia Hatzilambrou [National and Kapodistrian University of Athens]

“Cultural Memory and the walls of Athens. The Evidence of the Attic Orators”

Akiko Moroo [Chiba University of Commerce] “Troezenian Memories on the Greco-Persian Wars:

Revisiting the Themistocles Decree through the Troezenian Perspective”

Kazuhiro Takeuchi [Nagoya University] “Cultural Memory in the Athenian Decree (129/8 BCE) about the Thargelia”

【Session 2】Chair: Yoshiyuki Suto [Nagoya University]

Benjamin Gray [University of London] “Commemorating Displacement in the Hellenistic World: Remembering Exile, Rethinking Democracy”

Silvia Barbantani [Università Cattolica del Sacro Cuore]

“The Shadows of Homer and Alexander: Identity of Hellenistic Soldiers through their Epitaphs”

Vyron Antoniadis [Institute of Historical Research of the National Hellenic Research Foundation]

“Sanctuaries as ‘Time Capsules’: Sacred Cultural Memory in Hellenistic Delos”

Jakub Filonik [University of Silesia]

“The Discourse behind ‘sharing in the polis’: Political Language and Cultural Memory”

【Session 3】Chair: Antigoni Zournatzi [Institute of Historical Research at the National Hellenic Research Foundation]

Lilian Karali [National and Kapodistrian University of Athens], Daisuke Yamaguchi

“Uses and Meaning of the Cowrie Species Shell in the Ancient Mediterranean World”

Sebastian Fink [University of Innsbruck] “Remembering the Fallen City from Akkad to Athens”

Sanae Ito “Cyprus and the Assyrian Empire from the Reigns of Sargon II to Assurbanipal”

Takuji Abe [Kyoto Prefectural University] “King of Countries Collects All the Fine and Beautiful Things”

Giorgia Proietti [University of Trento]

“The Past in the Present, and the Present in the Past: the Commemoration of the Persian Wars before Herodotus”

【Session 4】Chair: Akiko Moroo

Marion Meyer “Glorious Ancestors: Aiakos and his Offspring in Athens and Aigina”

Yoshiyuki Suto “Priestly Decrees as Agency of Cultural Memory in Ptolemaic Egypt”

Charikleia Papageorgiadou [Institute of Historical Research of the National Hellenic Research Foundation]

“Remembrance and Identity in Roman Provincial Coinage. From Local ‘Histories’ to a Greco-Roman ‘Koiné’”

2024年3月20日(水)ー22日(金) 国立ギリシア研究財団歴史学研究所 (Zoomによる同時配信)



2024年度

カンファレンス

Formation and transmission of social memory: Indonesia and Japan

P.5参照

社会的記憶の形成と継承——インドネシアと日本

【Keynote Speech】

Fathur Rokhman [State University of Semarang] “Indonesian and Japanese Rule in Java: A Sociolinguistic Perspective”

Wasino [State University of Semarang] “Batik Hokokai: Heritage of Japanese Culture in Residency Pekalongan, Central Java”

Eko Handoyo [State University of Semarang]

“Anti-corruption Education in Indonesia based on Japanese Character Education”

Akiko Nozawa [Nagoya University], Nasution [Universitas negeri Surabaya]

Septina Alrianingrum [Universitas negeri Surabaya], Aditya Indrawan [Universitas negeri Surabaya]

“Where Memories of Bidadari Inhabit: Collaborative Research on Local Ecology between Folktale and Nation in Indonesia”

【Presentation】

Guo Jianing [Nagoya University] “Investigation, Research. And Preservation of Temple Cultural Properties in Japan:
A Case Study of Shinpuku-ji Temple in Nagoya's Ous District”

Inoue Hayata [Nagoya University] “Formation of Social Memory through Public Archaeology”

Noor Naelil Masruroh [Nagoya University]

“Migration and Expanding Family Networks: Knowledge Transmission in Minangkabau family Businesses”

Flady Faliyenco Franggaratz Abubakar Pae [Nagoya University] “Woven Memories: Traditional Dress Maker Stories”

2024年10月18日 金 13:30-18:00 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



シンポジウム

CHT 第3期キックオフシンポジウム

P.6参照

名古屋大学最先端国際研究ユニット「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」 成果報告会 アジアの文化遺産と交流史——儀礼空間を巡って

梶原義実 [名古屋大学] 「古代飛鳥宮をめぐる宗教的空間構成に関する予察」

影山悦子 [名古屋大学] 「シルクロードの商人ソグド人の宗教儀礼——考古資料による検討」

Steffen Döll [ハンプルク大学] 「中世・近世禅宗における七堂伽藍について」

郭佳寧 [名古屋大学] 「真言密教における講とその儀礼空間」

程永超 [東北大学] 「朝鮮通信使と琉球使節の外交儀礼」

2025年3月10日 月 16:00-18:30 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール (ハイブリッド開催)



2024年度大須文庫調査研究報告会

P.8参照

【第一部】文庫整理の歴史と課題

鳥居和之 [大須文庫長] 「文政目録から黒板目録へ」

三好俊徳 [仏教大学] 「名古屋大学による調査の成果と課題」

郭佳寧 [名古屋大学] 「コロナ禍以降の大須文庫調査の現状」

【第二部】真福寺善本叢刊第3期『神道篇別巻』刊行記念報告

大東敬明 [國學院大学] 「大須文庫所蔵神道関連聖教の調査と復元——八十通印信・『諸大事』を中心に」

伊藤 聡 [茨城大学] 「中世神道研究史上における真福寺(大須観音)神道文獻の重要性」

2025年3月28日 金 13:30-17:30 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



フォーラム

Etoki from Japan

【挨拶】 ハルオ・シラネ [コロンビア大学]

【解説】 阿部美香 [名古屋大学] 「絵解きとは何か」

阿部泰郎 [龍谷大学] 「本證寺絵伝とその絵解き」

【絵解き】 山岡武明 [四天王寺執事] 「聖徳太子絵伝絵解き」

梶田英伸 [三河すーぱー絵解き座]

「仏法と王法の王、聖徳太子とゆかいな仲間たち in ニューヨーク」

柳野明仁 [真宗大谷派 本證寺住職] 「琵琶語り 太子伝守屋合戦の段」

【トークセッション】 山本聡美 [早稲田大学]

【挨拶】 ハルオ・シラネ [コロンビア大学]

2025年3月11日 18:00-20:00 アメリカ・コロンビア大学 The Forum

ワークショップ

大須学ワークショップ2024

重要文化財「将門記」の解説と見学の会

——明治・大正期の大須観音の歴史と共に

【第一部 講演】 鳥居和之 [大須文庫長] 「大須観音の歴史と「将門記」」

【第二部 研究発表】 名古屋大学文学部学生 「明治・大正期の大須観音」

【史料見学】

2024年11月24日 13:30-15:30 大須観音 本堂1階ホール

文学部・人文学研究科秋期サロン (名古屋大学ホームカミングデー2024)

文化遺産に記憶される知の形——アーカイブスの構築を未来へ繋げる

講師 人類文化遺産テキスト学研究センター 郭佳寧・吉田早悠里・井上隼多

2024年10月19日 13:00-14:30 名古屋大学文学部棟 237講義室

通年の基盤的活動と研究連携

「アコリス考古学プロジェクト」

古代エジプト領域部における社会・宗教・文化変化の究明

「不破関の発掘調査」

発掘調査による不破関の構造、機能などの解明

「真福寺大須文庫調査研究」

令和悉皆目録の作成、断簡調査、デジタル画像化の実施

「土谷遙子先生の調査資料デジタル化」

土谷遙子先生によるインダス川上流調査写真のデジタル化、公開および活用



刊行本の紹介

機関誌

HERITEX vol.3

2020年3月

人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）は、人類にとってかけがえのない文化の遺産すべてをテキストとしてとらえ、アーカイブス・物質文化・視角文化の3つの視角を軸に、創造や意義をテキストとして読み解く統合テキスト学の知見より、人文学研究の新たなステージを目指す研究機関である。本誌はCHTが主体となった研究活動の成果や、関連・連携する諸機関や研究者の人類文化遺産をめぐるさまざまな調査や発見についての速報を、広く紹介するものである。



人類文化遺産テキスト学研究シリーズ



古典主義再考 I 西洋美術史における 「古典」の創成

木俣元一・松井裕美 編
中央公論美術出版、2021年



古典主義再考 II 前衛美術と「古典」

木俣元一・松井裕美 編
中央公論美術出版、2021年



博物館の未来を考える

博物館の未来を考える刊行会 編
中央公論美術出版、2021年



Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World

周藤芳幸 編
Phoibos Verlag、2022年



聖性の物質性

人類学と美術史の交わる場所
木俣元一・佐々木重洋・水野千依 編
三元社、2022年



宗教遺産テキスト学の創成

木俣元一・近本謙介 編
勉誠出版、2022年



ことば・ほとけ・図像の交響 法会・儀礼とアーカイヴ

近本謙介 編
勉誠出版、2022年

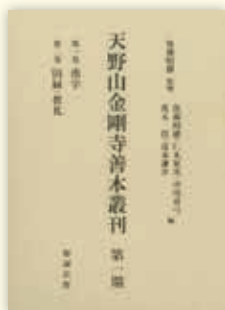


古代地中海世界と 文化的記憶

周藤芳幸 編
山川出版社、2022年

刊行本の紹介

関連書籍



天野山金剛寺善本叢刊

第一期

第一卷「漢学」

第二卷「因縁・教化」

後藤昭雄 監修

荒木 浩・近本謙介 編

勉誠出版、2017年



天野山金剛寺善本叢刊

第二期

第三卷「儀礼・音楽」

第四卷「要文・経釈」

第五卷「重書」

後藤昭雄 監修

荒木 浩・近本謙介 編

勉誠出版、2018年



南岳衡山と聖徳太子信仰

阿部泰郎／吉原浩人 編

勉誠出版、2018年



神性と経験

ディンカ人の宗教

ゴットフリー・リーンハート 著

出口 顯 監訳

坂井信三・佐々木重洋 訳

法政大学出版局、2019年



ボーイ・ミーツ・ガール
室町時代の女装少年×姫
『ちごいま』物語絵巻の世界

阿部泰郎 監修

江口啓子・鹿谷祐子・末松美咲・

服部友香 編

笠間書院、2019年



ギリシア案内記2

ラコニア/メッセニア

パウサニアス 著

周藤芳幸 訳

京都大学学術出版会、2020年



玄奘三蔵

新たな玄奘像をもとめて

佐久間秀範・近本謙介・本井牧子 編

勉誠出版、2021年



玄奘三蔵がつなぐ
中央アジアと日本

近本謙介・影山悦子 編

臨川書店、2023年

ハーバード美術館 南無仏太子像の研究

阿部泰郎・阿部美香・近本謙介・レイチェル・サンダーズ・瀬谷 愛・瀬谷貴之 編

中央公論美術出版、2023年